様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年５月２９日現在

機関番号：３３９１７
研究種目：基盤研究（B）
研究期間：2009～2012
課題番号：２１３２００５２

研究課題名（和文）　江戸時代伊勢商人の文芸活動の研究－石水博物館（津市）所蔵文献資料を手がかりに

研究課題名（英文）　Cultural activities by Ise merchants in the Edo period in documents held by Sekisui Museum in Tsu City, Mie

研究代表者
安田　文吉（YASUDA BUNKICHI）
南山大学・人文学部・教授
研究者番号：80121474

研究成果の概要（和文）：江戸時代の豪商達は、豊かな財力を背景に、公家･大名から庶民に至るまで幅広い交友関係を築き、文化活動に力を注ぎ、伝統文化の継承と発展を支えた。石水博物館は伊勢商人川喜田家と長井家の資料を一括して継承管理しているが、本研究はその中の文芸関係資料の調査を行い、文芸･演劇史を新たにする新資料も発見でき、川喜田家歴代当主は、自らも文芸･芸術活動に参画し、文化の担い手の活動を支え、作品を収集し、現在まで管理してきた功績が実証できた。

研究成果の概要（英文）：Super rich merchants with abundant financial background established association with court nobles and daimyos as well as common people, use a lot of energy in cultural activities, and supported the preservation and development of traditional culture. Sekisui Museum now holds the existing documents of Ise merchant Kawakida family and Nagai family. This study, out of the documents, has chosen literary and artistic documents and studied them. New documents have been found to rewrite the literary and drama history. It has been proven the successive heads of the Kawakida family themselves participate in literary and artistic activities, support activities by creators, collect masterpieces, and have treasured them.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００９年度	4,600,000	1,380,000	5,980,000
２０１０年度	1,800,000	540,000	2,340,000
２０１１年度	1,900,000	570,000	2,470,000
２０１２年度	2,000,000	600,000	2,600,000
年度			
総　計	10,300,000	3,090,000	13,390,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学・日本文学
キーワード：近世和学・近世小説・俳諧・能・歌舞伎・浄瑠璃・からくり・伊勢商人

１．研究開始当初の背景
石水博物館は、伊勢商人川喜田家の活動の記録類及び収集あるいは製作した文芸･芸術等の資料を所蔵している。歴代の当主が、実業の旁ら、文芸活動に勤しみ、東西の文化の担い手たちと交友を持って収集した膨大な資料が未整理のまま眠っている状況であったが、この中には文芸研究を書き換えるような資料も含まれることが予想されていた。

２．研究の目的
石水博物館の文芸資料を使用可能にするた

め、所蔵文献目録が作成できるように、資料の基礎調査を行い、新資料を発見した場合にはこれを詳細に調査し、その意義を明らかにし、江戸時代の伊勢商人が如何なる形で文化の進展と継承に寄与したかを明らかにすること。

３．研究の方法

所蔵資料は非常に多義に亘っているので、専門分野の異なる共同研究者８名が、それぞれの分野の資料を手分けして調査することとした。石水博物館にある簡易目録と博物館の学芸員龍泉寺氏の助言を手がかりとして、書誌調査を行い、必要とあればデジタル写真による撮影によって写真複写を作成し、詳細な検討を加えて、資料の成立や意義を調査した。毎年年度末に調査報告会を持って、研究の進展状況と成果の報告と意見交換を行い、進展状況を共有するようにした。最終年度には、公開シンポジウム「伊勢商人の文芸活動」を開催し、調査の成果を広く公表するとともに、参加者との意見交換を行った。

４．研究成果

膨大な資料で、研究を開始して以降も未整理資料が確認されたことが多々あり、全資料を調査することは不可能であったので、共同研究者の専門分野に絞って行った。川喜田家では、家業が軌道に乗った９代爾然以降、当主はその家業の傍ら文芸活動に勤しみ、それぞれの文化の担い手たちとの親交の中で、作品を依頼し収集し保存してきたことが明らかとなった。また、それぞれの分野で、以下に記すような成果を得たので、これを本研究の成果報告書(私家版)として、冊子に纏めた。また、書誌調査などの結果は、石水博物館が蔵書目録を作成される時の資料として、提供した。

(1)石水博物館の近世演劇資料は、一大コレクションである。先ず、番付類資料は、ほとんどが長井家から入ったものであるが、歌舞伎・浄瑠璃の芝居興行で刊行される役割番付 4745 点・辻番付 767 点、顔見世番付(役者付)269 点･絵尽(絵番付)1811 点(含む断簡)、見世物や付祭等の番付 28 点、他に役者評判等の見立番付 25 点、合計 7645 点、他に番付を書写したもの及び上演記録を記した書本 20 冊に及ぶ。この他、役者評判記 105 点、1 枚摺の芝居物 20 点､台帳は 3 点と少ないが、劇書 35 点なども所蔵されている。これらの資料は上方芝居が中心で、江戸芝居のものは少ない。番付については、上方及び伊勢のものが圧倒的に多いが、名古屋・江戸のものもかなり纏まった量で所蔵されている。同じものが複数あるが、整理して良質のものを１点取り分けて、台紙に貼はり(絵尽は除く)、上演年月日を考証して書き込んである。劇書は珍書の収集に力を注いだ川喜田家 16 代半泥子が収集したものも多い。絵尽については、「石水博物館（三重県津市）所蔵の番付及び絵番付のデータベース作成」で平成 9・10・11 年度科学研究費補助金基盤研究(B)(1)(研究代表者岡本勝)の給付を受けて、役者評判記についてはその後の自主研究で、報告した部分もあるが、今回の調査によっても、番付や劇書中に他では存在が確認されていない新出資料が相当数発見された。近世演劇・芸能研究における石水博物館資料に果たす役割は大きい。本研究では全所蔵文献目録の作成はできなかったので、研究の便に供するために、歌舞伎･浄瑠璃等興行番付目録を作成し、成果報告書(私家版)に添付した。浄瑠璃・からくりについての成果は(3)と(4)で述べる。

(2)所蔵の浮世絵等 1300 点余を調査し、国貞 419 枚、国芳 291 枚、国周 188 枚などが主要なコレクションだが、明治以降の「東京名勝図絵」、風俗絵や歴史絵など珍しいものも多く、他に所蔵を聞かないものも含まれている。初代国貞の所蔵が群を抜いて多いが、これは川喜田家 13 代遠里と 14 代石水が、初代及び 2 代国貞と親交があり、国貞の活動を助成していたからであろう。

　また、石水博物館の創設者川喜田家 16 代半泥子が同じ伊勢商人松坂の長井家の売立品を纏めて購入し、この中に東洲斎写楽肉筆とされる浮世絵「老人図」が含まれていることは夙に知られていたが、写楽の肉筆は非常に珍しく、ギリシャ国立コルフ・アジア美術館蔵の「四代松本幸四郎の加古川本蔵と松本米三郎の小浪」図と石水蔵の本図の 2 点(両者ともに扇面図)しか知られていない。この「老人図」について、右側に描かれているのは豊国筆の富本節『道行瀬川の仇浪』(お半長右衛門道行)の絵に、簪が添えられ、男の子が踏んづけている図、左側の老人は初代富本斎宮太夫とする説があるが、この頃の富本節全盛時代を牽引していたのは「馬面豊前（うまづらぶぜん)」と呼ばれた 2 代富本豊前太夫であり、顔の長い描き方から見てもこの人と見るべきである。

(3)石水博物館には、からくり関連資料として、座敷からくり、絵尽し、番付、からくり解説書などが所蔵されている。これらの多くは、やはり長井家から入ってきた資料で、長井家では、秀逸な座敷からくりを楽しむとともに、からくりに関連する多様な資料が大切に保存されてきた、この文化史的な意義は大きい。ここには、豪商たちの、技術に対する関心・興味と、遊びに対する貪欲なまでの好奇心の一端を垣間見ることができる。

座敷からくりは、「十段返り」「三段返り」「蹴鞠のからくり」「らいかうからくり」「三番叟からくり」の5種があるが、「十段返り」は他に類例を見出すことができない精巧な作りである。3 体の唐子が横一線に並んで、十段の階段を後蜻蛉返りしながら降りて行くもので、体内に仕込まれた水銀の移動だけで自ずと動くからくりである。今回の調査で、これがうまく動かない状況になっていたが、解体調査し、唐子ができるだけうまく回転して階段を降りるように復元した。「十段返り」も「三段返り」も、からくりが精巧であるばかりでなく、人形を収納する箱が階段の1部になっているなど、全てが美しく装飾されたコンパクトな箱に収まるように工夫され、箱自体も精巧で鑑賞に堪えうる工芸品である。「蹴鞠からくり」は規模が大きく、精緻なからくりで、台座の横に付いているハンドルでゼンマイを巻いて離すと、4 体の人形中 2 体が交互に鞠を蹴り上げる所作をするもので、台座の下に組み合わされた複数のカムやクランクを組み合わせて、ゼンマイの動作を人形の所作や鞠の動きに替えている。「らいかうからくり」は謡曲「土蜘蛛」の1場面をやはり台座に付けられたゼンマイを回すことで演じさせたものである。頼光の太刀が抜けたり、背後に張られた蜘蛛の巣を蜘蛛が這ったりしたらしい。「三番叟人形」もやはり台座のゼンマイで、人形に三番叟を演じさせるものだが、人形は鈴と扇を持って舞いながら 360 度回転する。こうした座敷からくりの仕掛けを解明し、併せてからくり解説書(『機巧図彙』『璣訓蒙鏡草』)と照らし合わせると、江戸時代のからくり技術の精巧さ、それを支えた豪商の好奇心と財力のすごさがよくわかる。また、石水博物館所蔵番付中にからくり演目を記したものが 25 点ある。安永期から文化期の竹田からくりの番付は多くは確認できない現状であるから、これだけ纏まっているのは貴重な資料であるが、特に、伊勢・名古屋の番付が多く、両地での竹田からくり一座の巡業の実情を把握する上で重要な手がかりと言えよう。

(4)石水博物館蔵の人形浄瑠璃の関係資料は、浄瑠璃本（丸本・道行揃・抜書本）283 点、絵尽 45 点、番付 538 点、合計 866 点であるが、多くはやはり長井家が収集したものである。これらの資料は、明和期から文政期までの 18 世紀後半から 19 世紀初頭を中心に、江戸時代末までに収集され、名古屋・伊勢の番付は松阪の本宅で直接に収集されたものだろうが、それ以外の、大坂・京・江戸の番付、浄瑠璃本、絵尽など全ては江戸店・京都店で収集、本宅に送られたものと推定される。

「丸本」64 冊は、七行本が 61 冊を占め、九行本 1 冊、十行本 2 冊を含む。七行本中、初版初摺本は 8 冊である。正徳元年(1711)7月以前初演の『冥途の飛脚』九行本(大坂・木屋平兵衛板)がもっとも古いが、収集時期は不明。「抜書本」(いわゆる稽古本)は 216 冊で、大坂版五行本 86 冊、江戸版六行本 119 冊、その他には京版の抜書本、写本がある。伊勢は上方興行圏であるのに、江戸版が多いことが注目される。絵尽は 45 冊でその中に 8 冊の新出本がある。番付は 538 枚、その中 116 枚が新出の資料、その中でも 86 枚はこれまで全く知られていなかった 57 興行の存在が確認できる。

石水博物館の浄瑠璃資料は、良質で他所に伝存を見ないものも含まれ、研究に一石を投じるものであるが、これらのほとんどが、歌舞伎やからくり資料と一緒に区別なく収集されたものである。上方は勿論遠く離れた江戸の興行資料まで大量に収集しているのは、単に観劇や浄瑠璃稽古のためと言うのではなく、劇界や出版界との交流の中で、また時には読み物や絵本として、纏めて収集されたことによるのではないか。

(5) 石水博物館は、謡曲関係の文献が 100 点弱ある。江戸時代に刊行された「三百番」「二百番」といった謡本集 11 点、写本の謡本 1 点、単体の謡本 43 点、他に能楽論書、謡曲注釈書、囃子方関係書などだが、そのほとんどは長井家から入ったものである。謡本以外に、囃子方(太鼓)の資料が多いのが注目されるが、これらとは伝来を異にする観世流の 6 冊組 147 曲を収める写本の謡本(筆蹟・冊子 30)は特記すべき資料である。

この謡本の成立・書写者は不明であるが、第一冊《高砂》と第二冊《白楽天》に「観世黒雪直伝の章句（節付）であること」「元和九年八月二十二日」の年記が記されていることなどから、江戸初期の近衛家周辺で、師匠から教えを受けた節付や注意事を、自ら朱で書き込むために作成されたものと思われる。また、「狂言応答」の詞章の書込があることから、この謡本の書写者は、囃子に委しく、ワキを勤める事があった人物と考えられる。古筆了仲(1656-1736)と了意(1751-1834)の極めが付されていて、それには、本文は四辻季継筆、黒蒔絵箱の字は烏丸光廣筆とされているが、その真偽は疑問。

川喜田家には、『源氏物語早蕨』1 冊と共に、文化 8 年(1811)8 月 15 日の御成之節に篤之介(13 代遠里)が拝領(『早蕨』添付の折紙)した。江戸時代初期の演能の実態がわかる貴重な資料であるが、川喜田家では謡本としてではなく、家の格式を保証する拝領の貴重な古典籍として管理・保管されてきたのである。多くの謡本集を所蔵してきた長井家の当主は、謡いや囃子を習い、大名家や上流武士たちとの付き合いに役立てていたのであろうが、大

量な謡本は、川喜田家のこの謡本と同様に、実際の稽古用というよりも、家の勢力を誇る財として収集、所蔵されていたように思われる。

(6) 石水博物館には、松坂の町衆で和学をよくした村田元次関係資料が纏まって所蔵されている。これについては、岡本勝氏が夙に、村田家の家運が傾いた時、縁者の長井嘉左衛門が助力したために、元次・全次父子書写の本が長井家に収まり、それを川喜田が引き継いだもの(岡本勝『近世文学論叢』おうふう 2009)と指摘しておられる。その中には、『詩歌　法眼季吟七十賀』『清水谷実業詠草』など、他に所在を聞かないもの、『於豊前小倉城御城御賀千句』など、最善本というべきものが含まれており、貴重な蔵書である。また、北村季吟が伊勢を訪れた時の記録『伊勢紀行』には、荒木田定道・是水、岡山俊正、松本休也、村田元次・全次、小津道方・道生、浜口宗有、向井守静、青木安貞、竹内道本など、伊勢在の文人たちとの交流したことが随所に書かれている。この中の松本休也は角屋七郎次郎の三代忠栄の養子であるように、これらの人々は松坂町衆の中でもかなり上位の位置を占める人々である。また、季吟が津藩主藤堂高久や弟高通と親しかったことも読み取れる。藤堂高久の側近でもあった玉置無端が季吟を伊勢へ招き、藤堂家との仲立ちをしたのではないか。

北村季吟、西山宗因など京大坂の文人と藤堂家や伊勢の豪商たちとの親密な関係が築かれ、それによってもたらされた作品群が石水博物館は伝わっているのである。

(7) 9 代爾然とその息 10 代潭空は、出家後、京都嵯峨野に庵を結び、それぞれ武者小路実陰とその息高松重季に和歌を学び、公家衆と交際した。石水博物館には、実陰や重季の詠作も勿論所蔵されているが、冷泉家本と類似の奥書を持つ定家本系の『古今和歌集』が 2 点、『後撰和歌集』が 1 点、冷泉爲村の書入を持つ『細字本古今和歌集』1 点、為村家集 3 点、爲村の詠草 1 軸もあり、伝授の切紙なども残っていて、冷泉家とも親しい交渉があったことが窺われる。

また、所蔵文献中には、『源氏物語』に関わるものも多い。これは、北村季吟などとの親交、本居宣長家とは姻戚関係にあり、12 代夏蔭や 13 代遠里は国学をよくしたといった背景があった。中でも『源氏物語早蕨』(筆蹟・冊子 24)は僅か 22 丁の枡形本で、3 箇所の欠脱もあるが、陽明文庫本に近い別本系の「源氏物語」である。大倉好斎と古筆了仲の極めに寄れば「源三位頼政」とするが、鎌倉時代書写と認められる貴重本。(4)にも触れた如く、黒蒔絵箱入の謡本とともに 13 代遠里が拝領し、川喜田家に伝来したものである。

こうした王朝文学の逸品は、川喜田家歴代当主が公家衆など上流社会との文芸交流によって、収集したものである。

(8) 曲亭馬琴（著作堂主人、1767-1848）は江戸後期を代表する戯作者であるが、天保 15 年(1844)、78 歳の老齢ですでに眼も見えない状態であった。自作読本を嫁お路に詠ませ、自ら批評し、嫁お路に代筆させて纏めた。そのお路代筆本を借りて、松坂の小津桂窓(馬琴の知友)が写本を作成していた。これまでこの本は全く知られていなかったが、今回の調査で、その小津桂窓本『著作堂旧作略自評要』(夏-30)を発見することができた。当時の馬琴書翰によって、天保 12 年に自作批評を開始し、天保 15 年までには纏まっていたと思われる。これは、馬琴研究および近世小説研究にとって第一級の資料であり、演劇研究や出版研究などにも益する内容を含んでいるので、簡便な注を付して影印・翻刻本を汲古書院から公刊した。

川喜田家 13 代遠里は、懇意であった小津桂窓を通して、馬琴の著作を多数購入しており、石水博物館には馬琴の著作が多数所蔵されている。この新出の書はそうした親交の中で、桂窓から遠里に譲られたのであろう。

戯作者山東京伝(1761-1816)は川喜田家 12 代夏蔭と親交があった。夏蔭は養子に入る前は分家の紅問屋玉屋を経営していた。寛政 4 年(1792)、京伝が玉屋景物本『女将門七人化粧』を、さらに文化 2 年(1805)にも〔玉屋景物本〕を作っている。江戸本町 2 丁目の玉屋の近くに式亭三馬が化粧品店を出し、玉屋(京伝)と三馬は広告宣伝で鎬を削り、文芸と商売は深く絡み合う結果となっていた。また、大田南畝とも親交があり、石水博物館には、南畝の他に類を持たない作品も所蔵されている。

夏蔭・遠里の 2 代は、主に江戸の文人や絵師たちと親交を持ち、彼らの作品に深い関心を持ち、作品を依頼し、収集したのである。

(9)川喜田家代々の当主は、京や江戸の文化に関わっただけではなく、地元伊勢の文化人との交流を大切にしていた。12 代夏蔭は本居宣長の門人で、同郷同門の柴田常昭と親しく、その家集や彼が書写した宣長書入の書籍(『梁塵愚案抄』など)が、石水博物館に所蔵されている。13 代遠里も本居春庭及び大平の門人で、小津桂窓をはじめ、歌人磯部長恒らと親しかった。茶道表千家 5 代堀内宗完に学んだ。14 代石水は、富樫広陰及び松田直兄、井上文雄に和歌を、茶道は住山楊甫門から、金森得水の紹介で表千家 10 代吸江斎の直門となった。夏蔭・遠里・石水は国学や和歌を伊勢在の文人たちと楽しみ、その親交を伝手

にして京都や江戸の文人や茶人たちから作品や道具を入手した。

石水は歴代の当主が収集した文献や美術品を整理し、再評価することに力を注いだ。この作業は、孫の16代半泥子に引きつがれ、半泥子はこれらの収集資料を管理するために石水会館を作り、それが現在の石水博物館の基礎となった。さらに半泥子は茶道家としても著名で、自ら陶芸作品を制作した。良質な文芸・芸術資料の収集にも熱心で、松坂の長井家の所蔵品売立を纏めて購入したのをはじめ、伊勢から文芸品が流出するのを防ぐことにも力を注いだ。

半泥子がつなぎ止めた長井家の資料には、(1)～(5)に述べた如く、演劇・芸能資料が多いが、今回の調査によって、13代長井五鈴は裏千家の茶人として知られる一方、江戸や上方の俳人たちとも交流しながら、伊勢俳壇の中心人物として活躍したことを伝える資料が見つかった。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計18件）

① 神津武男、近石泰秋氏旧蔵の浄瑠璃本―附リ・浄瑠璃本目録（稿）―、早稲田大学高等研究所紀要、査読無、5号、2013、135－182
② 飯塚恵理人、石水博物館所蔵『江戸初期筆六冊組観世流謡本』のクセの出の拍子についての注記、東海能楽研究会会報、査読無、17号、2013、12－13
③ 神谷勝広、大田垣連月と松浦武四郎・川喜田石水夫妻、同志社国文学、査読無、78号、2013、82－90
④ 安田文吉、『四天王大江山入』考、南山大学日本文化学科論集、査読無、13号、2013、27－38
⑤ 岡本聡、「五大」思想の死生観、アリーナ（中部大学）、査読無、14号、2012、383－394
⑥ 山田和人、からくりの文化史―竹田からくりの絵を読み解く―、からくり人形の世界―その歴史とメカニズム―、査読無、安城市歴史博物館特別展図録、2012、71―78
⑦ 安田文吉、『茲木曾山雪宮本』考 補遺、南山大学日本文化学科論集、査読無、12号、2012、35－48
⑧ 早川由美、伊勢俳壇と山口羅人門―津市石水博物館川喜田家資料を軸にして―、連歌俳諧研究、査読有、122号、2012、13－24
⑨ 岡本聡、荒木田麗女『をだまき』（石水博物館）翻刻、人文資料研究、査読無、2012、6号、5－33
⑩ 飯塚恵理人、（紹介）石水博物館所蔵江戸初期六冊組上掛系謡本、東海能楽研究会年報、査読無、16号、2012、8－9
⑪ 神津武男、浄瑠璃別作品名別所在目録（未定稿）一浄瑠璃絵尽研究の現在と、二三の補遺―、かがみ、査読無、42号、2012、117－165
⑫ 岡本聡、秋風別墅考、連歌俳諧研究、査読有、120号、2011、1－13
⑬ 山田和人、竹田からくりの演目と分類、西鶴と浮世草子研究、査読無、5号、2011、98－121
⑭ 安田文吉、『茲木曾山雪宮本』考、南山大学日本文化学科論集、査読無、11号、2011、23－38
⑮ 神津武男、嘉永三年板『浄瑠璃外題目録』の諸本―「四書房合梓」「千葉久栄堂」など近世浄瑠璃本刊行に関する考察―、2010、早稲田大学高等研究所紀要、査読無、2号、9－41
⑯ 岡本聡、「和歌名所追考　引書目録」その一、人文資料研究、査読有、3号、2010、21－22
⑰ 山田和人、からくりと式亭三馬の滑稽本、同志社国文学、査読無、72号、2010、29－40
⑱ 岡本聡、「嵯峨本伊勢物語」「扇の草紙」、『江戸の歌仙絵　絵本にみる王朝美の変容と創意』展図録、国文学研究資料館、査読無、2009、100－101

〔学会発表〕（計6件）

① 安田文吉、安田徳子、山田和人、冨田康之、神谷勝広、飯塚恵理人、岡本聡、神津武男、早川由美、シンポジウム　伊勢商人川喜田家代々の文芸活動、平成21～24年度科学研究費補助金「江戸時代伊勢商人の文芸活動の研究―石水博物館（津市）所蔵文献資料を手がかりに」成果報告会、2013年3月16日、津市商工会館丸之内ホール
② 神谷勝広、馬琴の自作批評―石水博物館蔵『著作堂旧作略自評摘要』―、日本近世文学会平成24年度秋季大会、2012年10月28日、福岡大学
③ 安田文吉、写楽筆老人図扇面の謎を追う、新・石水博物館開館記念　所蔵名品展講演会、2011年10月23日、津市商工会館丸之内ホール
④ 早川由美、川喜田爾然斎千町の和歌と俳諧―伊勢商人の文芸活動―、俳文学会第62回全国大会、2010年10月16日、四国大学
⑤ 岡本聡、嵯峨本『伊勢物語』慶長十五年版の位置づけ、慶應義塾大学絵入り本プロジェクト発表　2010年2月19日、慶

應義塾大学
⑥ 岡本聡、宣長と勅撰集、鈴屋学会主催「宣長十講」、2009 年 9 月 19 日、松阪市商工会議所

〔図書〕（計 3 件）
① 安田文吉、安田徳子、山田和人、冨田康之、神谷勝広、飯塚恵理人、岡本聡、神津武男、早川由美、私家版、平成 21～24 年度科学研究費補助金「江戸時代伊勢商人の文芸活動の研究―石水博物館（津市）所蔵文献資料を手がかりに」研究成果報告書、2013、270p.
② 神谷勝広、早川由美、汲古書院、馬琴の自作批評―石水博物館蔵『著作堂旧作略自評摘要』―、2013、211p.
③ 岡本聡、笠間書院、香川景樹、2011、122p.

６．研究組織
(1)研究代表者
安田　文吉（YASUDA BUNKICHI）
南山大学・人文学部・教授
研究者番号：80121474

(2)研究分担者
安田　徳子（YASUDA NORIKO）
岐阜聖徳学園大学・教育学部・教授
研究者番号：00135279
飯塚　恵理人（IIZUKA ERITO）
椙山女学園大学・文化情報学部・教授
研究者番号：00232132
神津　武男（KOUZU TAKEO）
早稲田大学・付置研究所・研究員
研究者番号：10424821
冨田　康之（TOMITA YASUYUKI）
北海道大学大学院・文学研究科・教授
研究者番号：20217540
神谷　勝広（KAMIYA KATSUHIRO）
同志社大学・文学部・教授
研究者番号：40233952
山田　和人（YAMADA KAZUTO）
同志社大学・文学部・教授
研究者番号：60191300
岡本　聡（OKAMOTO SATOSHI）
中部大学・人文学部・准教授
研究者番号：90280081